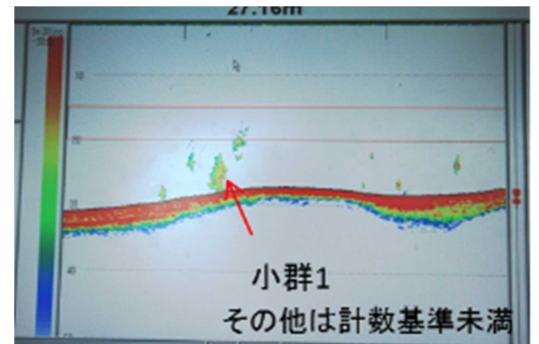
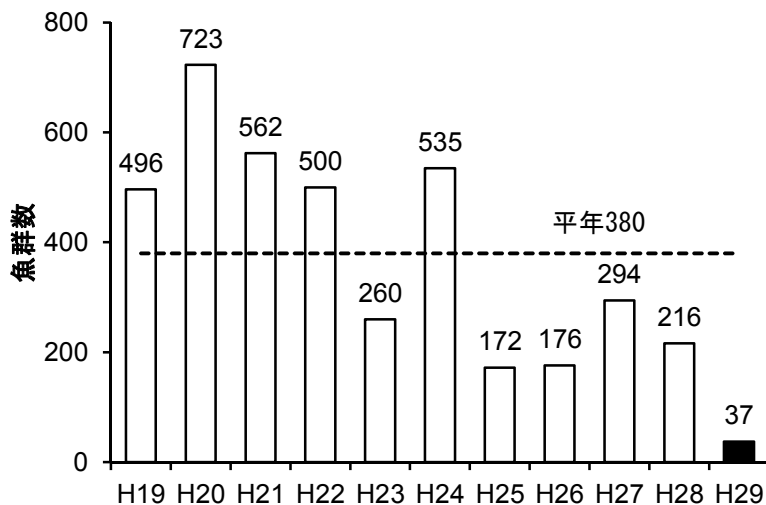


アユ資源・漁獲の状況について

1. 資源状況

①1月の魚群調査

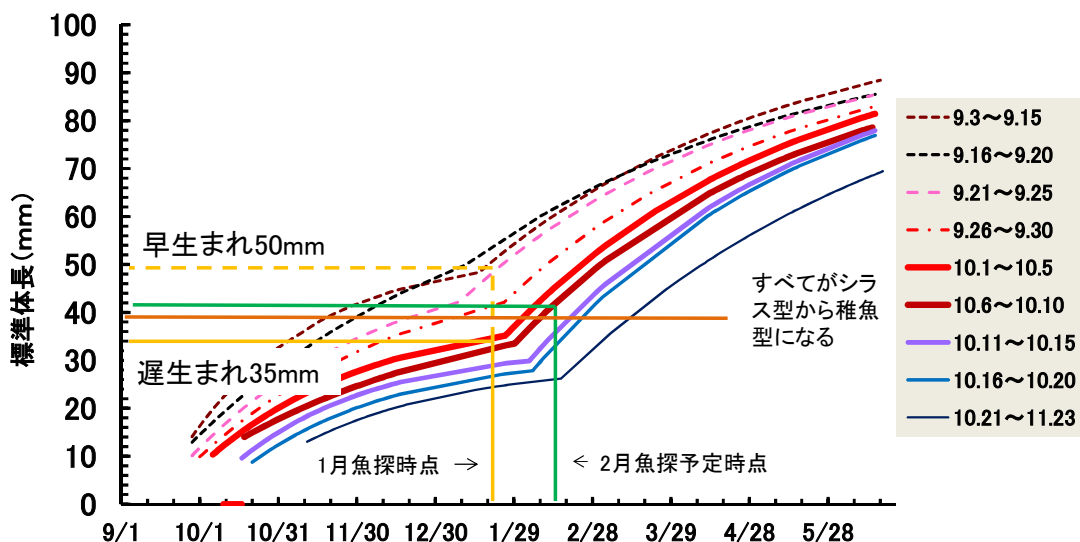
- ・魚群探知機による1月の魚群数は37群と、平年値380群の10%であった。
- ・アユの生育の遅れが群れの形成の遅れとなり、資源量を評価できていない可能性がある。
- ・2月上旬(1日・3日)に行った臨時調査では、1月と同水準の24群を観測したが、計数基準未達の極小群が観測されており、成長に伴う魚群の形成過程にあると考えられる。



2月上旬の臨時調査でとらえたアユの群れ。「小群1」の他に小さい魚群が見られる。

○アユのふ化時期の違いとその後の成長および魚群形成能力の関係

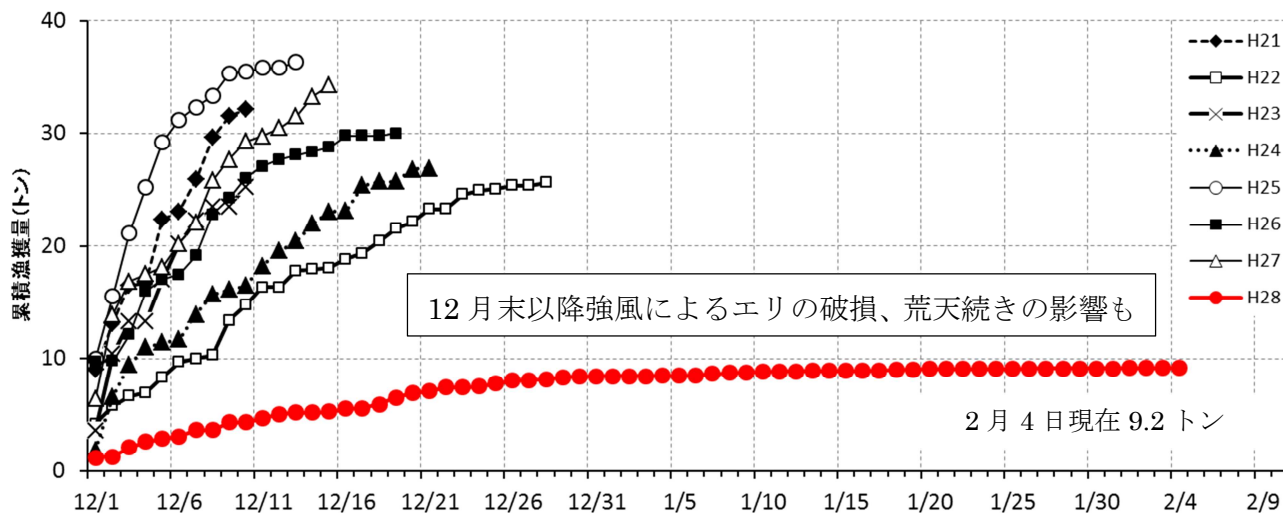
- ・アユの成長は、ふ化時期によってその後の成長が大きく異なる。
- ・アユは体長4cm以上の「稚魚型」になると群れになる能力が高まるが、そのサイズに達する時期はその年のアユのふ化時期によって大きく異なる。
- ・一般に、9月生まれのアユは1月中旬には既にそのサイズに達しているが、10月生まれのアユは達しない。2月中旬になると多くのアユが体長4cm以上になり、魚群として捉えやすくなる。



2. 漁獲状況

① エリ漁

- ・12月の漁獲は約8.4トンで、注文量20.2トンの約4割と不漁となった。
- ・1月以降の漁獲も、年末の強風によるエリの破損や、年明け以降の荒天続きの影響もあり、約0.8トンと非常に低調となっている（2/4現在）。



② アユ^{ちゅうびきあみりょう}沖曳網漁（底曳網）

- ・県漁連は、アユ種苗の出荷量を確保するため、エリ漁に加えて、2月のみ操業が可能な沖曳網漁（底曳網）によるアユ種苗の採捕を実施中。（沖曳網漁によるアユ種苗の採捕は十数年ぶり）
- ・一定の漁獲が見込める漁場が限られることや、専用の漁具が必要なことから従事する漁業者は今のところ2隻と少なく、これまでに2月1日と2月4日に操業されたが、それぞれ19kgと18kgの漁獲。
- ・通常2月には、鮮魚を対象とした沖曳網漁の操業も行われるが、今期は操業を見合わせている状況。



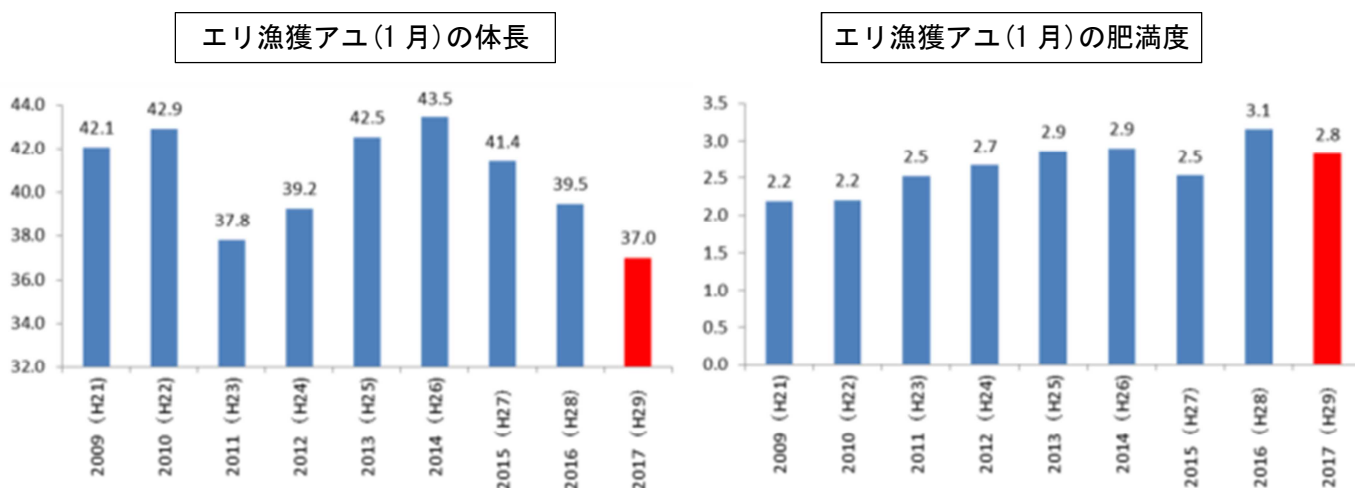
沖びき網漁の操業

3. 不漁の原因

- ・アユの産卵量、湖中での稚魚調査では、平年の約2倍量を観測しているが、産卵ピークが遅く、漁獲サイズまで育ったアユが少ないことが考えられる。
- ・これは9月下旬まで少雨により、産卵河川の水量が少なく、水温も産卵適水温(23℃以下)より高かったため。

4. アユの生育状況と琵琶湖の環境

- ・今期はアユのサイズは小さいものの太り具合(肥満度)は正常で、現在までのところ栄養状態悪化の兆候はみられていない。
- ・1月の湖水温は8.9-9.0℃と平年値より0.3-0.4℃高く推移。



5. 今後の対応

- ・水産試験場では、今期のアユの成育見通しや過去の漁獲状況から、4・5月頃まで不漁が続くと予測。
- ・今後、魚群探知機による資源状況の把握、漁獲標本によるアユの成長、栄養状態(肥満度)の調査を実施。
- ・特に魚群探知機による調査では、通常より広い範囲での調査を実施し、アユ資源の状況把握を行う。